

子どもが自ら思考し、判断力と表現力を磨くメディア活用教育実践 ～タブレット型情報端末がある教室の学びの風景～

南島原市立長野小学校

教諭 田中健太郎

1 はじめに

今、学校ではわかりやすい授業づくりの環境として、パソコンやプロジェクターなどICTが整備され、教師もICTを使った授業改善に取り組んでいる。しかし、それらICT活用の目的は、教師がアニメーションやシミュレーションなどの動画を活用し、「子どもの知識や理解を補完する」ものあたり、拡大投影して焦点化することで「授業の効率を上げる」ものであったりすることが多い。これからは教師によるICT活用だけでなく、児童生徒に情報活用能力の3つの力（A情報活用の実践力、B情報の科学的な理解、C情報社会に参画する態度）を養うICT活用についても取り組んでいくことが重要である。そのために、普通教室において子ども一人一台もしくはグループに1台のパソコン整備の必要性が挙げられている（「教育の情報化に関する手引き」平成22年10月文部科学省参照）。そこで、今、注目を浴びているのが、画面をタッチして操作するコンパクトなタブレット型情報端末（以下「タブレット」）である。このタブレットを使ってどのような授業実践ができるのかについて、実際にタブレットがある教室の学びの風景を紹介しながら、その効果について考える。

2 タブレットを使った学習活動の事例

(1) 環境について

実践は、主に南島原市立長野小学校の平成23年度第6学年（9名）を中心に行った。使用した機材は、パナソニック教育財団平成23年度先導的実践研究「『つくって伝える』学びの質的向上を目指したループリック連動型Web教材の開発」（研究者代表：東北学院大学 准教

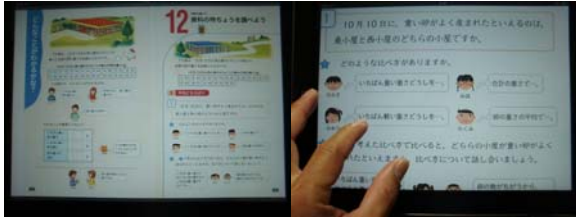
授 稲垣忠）の支援により、7台のタブレット（iPad2）をお借りするなど、合わせて9台のタブレット（iPad・iPad2）を準備することができた。少人数の学級のため、これで子ども1人1台またはグループで1台の環境になった。また、インターネットへの接続には携帯電話会社のモバイルWi-Fiルータを使用した。



(2) 活動事例① ～手作りのデジタル教科書～

タブレットは普通のパソコンと違い、起動が早い。ボタン一つで瞬時に画面が表示される。さらに直接画面をタッチして、普通の教科書をめくるような感覚で目的のページを素早く表示させることができるため、子どもの思考を妨げない。また、画面タッチでの拡大やページ内の移動がマウスやキーボード操作比べてとてもスムーズにでき、提示型の端末として大変効果的であった。

写真は算数の教科書をスキャナで取り込み、PDF化したものを表示させたタブレットの画面である。指でタッチしてスムーズに拡大することができ、スクロールやページめくりもスムーズにできる。この画面をプロジェクター等で拡大投影することで、簡易型の提示型デジタル教科書になった。



(3)活動事例② ～教育用アプリケーション～

i P a dにはいろいろな教育用アプリケーション（アプリ）が開発されており、中にはゲーム感覚で子どもが夢中になって取り組めるものがある。授業の導入でモチベーションを高めたり、課外でスキルアップ活動に取り入れたりすると効果的である。

参考までに、D-Proje ct 2（デジタル表現研究会）のサイトでは、子どもの学習や教育活動に使えるような i P a dアプリが紹介されている。

<http://www.d-project.jp/2012/iPad/D-proApps.pdf>

(4)活動事例③ ～ネット検索～

インターネットを使って調べ活動を行う際、わざわざパソコン教室へ移動しなければならなかった。パソコン教室へ行くと子どもたちはパソコンを使うことが一番のねらいになってしまい、肝心の学習のねらいが達成できない場合もある。そこで教室の自分の机上でネット検索ができるようにした。すると、教室移動がなく、シームレスで調べ学習へ移れるため、ねらいをより意識して学習に取り組めるようになった。



(5)活動事例④ ～表現活動～

プレゼンテーション用のスライド制作は、画面を指でタッチする操作が子どもたちに直感的に受け入れられ、すぐに使いこなすことができた。また、グループのメンバーが画面を取り囲

むようして、学び合いながら活動していた。さらに、マウスやキーボードを使って作業する場合に比べて、文字や画像をバランスよく配置するなど、スライドも工夫しながら短時間で簡単に制作することができ、その分、発表の練習に時間を充てることができた。

(6)活動事例⑤ ～カメラ機能を使って～

タブレットにはカメラが内蔵され、静止画や音声付き動画が撮れるものがある。そこで、互いに練習を撮り合い、よいところを認め合ったり、課題を見つけたりした。以前、同じようなことをデジタルカメラを使って実践したことがあるが、デジタルカメラの画面では小さくて見えにくい。かといってパソコンやモニターにつなぐのは大変面倒であった。しかし、タブレットは大きな画面でそのまま確認することができるため、楽に準備ができ、学び合いの効果も高い。

写真は体育のマット運動で互いに技を取り合い、自分の技の完成度を確かめたり友達の良い点を見つけたりしながら学び合っている様子と発表の様子を取り合い、姿勢や声の大きさ、話し方などを確認しながら練習している様子である。



3 「子どもが自ら思考し、判断力と表現力を磨くメディア活用教育実践」の実際

ここまでタブレットの教育的活用の有用性や可能性について述べてきた。次に、タブレット

を活用した「子どもが自ら思考し、判断力と表現力を磨くメディア活用教育」について、一つの実践を通して取り組んできたことをまとめる。

(1) 実践の概要

本実践は、6年生児童がタブレットを活用して「『つくって伝える』学びの質的向上を目指したループリック連動型Web教材」(以下「つくった」)を使って、社会科で歴史新聞づくりに取り組んだ。

※「つくった」とは

「『つくって伝える』学びの質的向上を目指したループリック連動型Web教材」の略で、「新聞」「プレゼンテーション」「ビデオ」「リーフレット」の4つのメディアについて、子どもたちの「つくって伝える学習活動」を助ける教材である。



<http://www.ina-lab.net/special/tsukutsuta/>

その中の新聞では、新聞づくりのポイントとなる「取材」「記事」「ふり返り」「見出し」「わりつけ」「図・写真」の6つの観点について、それぞれS・A・B・Cの4段階で評価基準が示されている。その評価基準は文章による表記のほかに、動画や画像でのモデル(サンプル)が用意されていて、子どもがひと目で理解しやすいようになっている。いわば子ども向けのデジタル版ループリックである。

(2) 実践の目的

単元末に設定された「歴史新聞をつくろう」という学習活動を通して、言語活動の充実を図っていきたいと考えた。そこで、今までの経験から、次の点を指導の重点とした。

- 読み手がだれかを意識せず、難しい言葉そのまま使用したり、詳しく書きすぎて文字情報が多くなったり、伝わりにくい新聞になってしまわないように相手意識をしっかりとって新聞づくりに臨ませる。
- 国語科での新聞づくりの学習を生かして、新聞の特性を引き出すようにする。
- インターネットや図書資料等からの引用文が多くならないように、自分が伝えたいことを記事として再構成させる。
- 限られた時間の中でよりよい新聞をつくるため、効率よく取り組ませる。

これらの点を解決する手段として、子どもたちにタブレットを与え、いつでも自分が必要なときに「つくった」を参照しながら新聞づくりが行える環境にした。つまり、社会科の新聞づくりにおいて、タブレットと「つくった」を子どもたち自身が使うことで、「子どもが自ら思考し、判断力と表現力を磨く」言語活動の充実を図ることが本実践の目的である。

(3) 実践の流れ

<新聞のテーマとねらい>

「戦争と人々の暮らし」

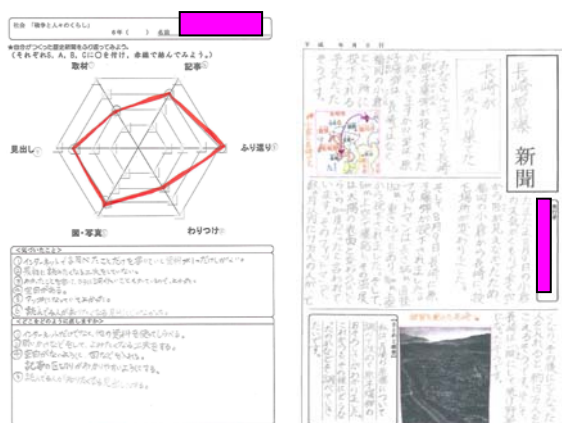
沖縄戦や広島・長崎への原爆投下、終戦に至る経緯の中で、一番伝えたいと思った事を新聞にして5年生に伝える。

<活動の流れ> 全3時間

- ① 前回作成した新聞の自己評価をふり返り、観点ごとに改善するポイントおさえる。「つくった」を参照しながら自分の新聞を振り返り自己評価シートを準備し、レーダーチャート図で表すことで、自分の新聞のどこに改善ポ

イントがあるかつかみやすくした。

- ② 「つくった」の「取材」の観点を利用して、新聞の記事にしたい事柄を教科書、図書資料、インターネット等を使って調べ、必要な情報を「取材ワークシート」にメモをとる。インターネットによる検索はタブレットを活用した。
- ③ 「つくった」の「記事」を参考にして記事の下書きをワークシートに書く。ワークシートは文字数を制限し、資料等を丸写しするのではなく、自分の言葉で再構成することを意識させた。
- ④ 「つくった」の「見出し」「わりつけ」「図・写真」を参考にして、新聞用紙に見出や記事を書き込んだり、絵や図などを張り付けたりして完成させる。
- ⑤ 5年生の感想を読み、ふり返りをする。



(4)改善された点

- 自己評価のワークシートに何を書けばいいか迷う子どもがいたが、「つくった」を見ることで観点が明確になり、より具体的なふり返りを書けるようになった。
- 「5年生」という相手を明確にすることで、より詳しく調べ、理解しようと意欲が高まった。
- 資料で調べたことを一度ワークシートに書き、それをもとに「再構成」して記事に書くことを意識させることができた。
- 5年生の感想からわかった「絵は大きい方が良い」「文章は短い方が良い」というこが

「つくった」の「わりつけ」や「記事」の評価に結びついていることに気づく子どもがいた。

- 自己評価をするためのレーダーチャート図で、特に自分が改善したい観点を絞ることができた。

(5)考察

新聞づくりを通して社会科の学習内容の理解を深め、思考力、判断力を身につけていくことが本来の目的である。しかし、国語科で身につけた新聞づくりの力をうまく活用に結びつけないと、ねらいとする社会科の力も高まらない。言語活動を充実していくためには、基礎基本を国語科でしっかりと習得させ、活用できるようにしなければならない。そこで、習得したことの要点をふり返り、効率よく学習を進めていくことに、この「つくった」が有効であった。また、その「つくった」をいつでも使える環境としてタブレットの活用も有効であったと言える。

4 おわりに

全てをICT(デジタル)で行うのではなく、アナログのよさとデジタルのよさを見極めて活用することが上手なICT活用術ではないだろうか。その点、タブレットはアナログに近い感覚で活用でき、アナログとうまく融合しての活用が期待されるICT機器だと思われる。

<参考>

『つくって伝える』学びの質的向上を目指したルーブリック連動型 Web 教材の開発

(研究代表者: 稲垣忠 / 東北学院大学教養学部准教授)

D-Project 2 <http://www.d-project.jp/>

(会長 中川 一史 / 放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター教授)